みんなで語ろう民放史

題字　中川　順

幻想の美をとらえた札幌五輪
冬のスポーツと格闘した技術者の記録

小高　博二（HBC）

ソルトレークの中継を観ながら冬のスポーツと格闘したかつての日々を懐しく想い出しました。

テレビカメラとの出会いは入社2年後の1954年（昭和29年）夏、函館で催された「北洋博」のテレビ実験局会場でした。前年にNTVが開局、この実験局のテレビ電波は民放では日本で二番目のものでした。東芝の50W送信機と3段スーパーターンスタイルアンテナで会場の簡易スタジオや野外ホールから市内に配置した48台の受像機に映像を送り出しました。カメラは、米GE製2台とラジオ東京（現TBS）が搬入した2台の英国PYEカメラでした。

夏の真っ盛り、50日の実験放送には、TBSから2人ずつ5組の技術陣が応援に来てくれました。冷房設備もない調整室。オーバーヒートする機械を、「うちわ」であおぎながらの毎日でした。

宿は会社の寮でしたが、朝早く「いかーん、いかーん」という声が遠くに聞こえます。寮母さんに「いけないって、何ですか」と尋ねると、イカ売りの声でした。とれたてのイカは透明で固い食感があり、皆がいかにイカ刺しのトリコになったかはご想像通りです。

翌年4月、TBSテレビ開局。技術研修をさせて頂き、米RCAカメラと出会いました。

1957年。HBCテレビ開局。実験局以来のGEカメラに加え、芝電気製のRCA型カメラが制作の主役でした、芝電のカメラは、故障箇所も米RCAと同じで、ここまでコピーしなくてもと思ったものです。

テレビ実験局

ジャンプの迫力をどう撮るか

HBCが冬季のスポーツ中継を始めたのは開局の翌年です。ジャンプ、スラローム、アイスホッケーなど。最初はスタジオカメラを動員して中継しましたが、PYEカメラを積んだ中継車が完成して屋外制作に威力を発揮しました。

ジャンプは、ある程度離れたところから同一条件で撮らないと選手相互の比較は出来ません。

だが、映像は単調で迫力を欠くことになります。なんとか飛行する選手を、離陸する飛行機を見上

げるようなアングルで撮れないものか。

PYEを分解、モニターを外し、IO部（イメージオルシコン）に50ミリ単焦点レンズを、そして光学ファインダーを取り付けたものを試作。カメラマンは、これを肩に担ぎ付属機器のパックを背負い選手をフォローします。名付けて〈バズーカ・カメラ〉。現在のハンディカメラの感じです。この映像を選手がランディングしてブレーキングエリアに向かっている間にVTR再生しました。今では普通のことですが、当時としては冒険的な試みだったと思います。

バズーカ・カメラ

札幌オリンピックを予見して

60年代の初め、技術担当の杉山常務が推進役で、手稲山の麓に、冬はスキー場、夏はゴルフ場と遊園地となる「テイネオリンピア」を建設しました。このネーミングは、将来、札幌でオリンピックが開かれることを想定したものと後に知りました。その予測通り札幌オリンピックが開催され、手稲山でも世界の一流選手の競技が行われましたが、杉山さんはこの五輪を見ることなく世を去りました。

1961年春のIOC総会で、72年冬季オリンピックの札幌開催が決定、HBCが競技中継に携わるかは白紙の状態でしたが、冬のスポーツの勉強にと翌年のグルノーブルプレオリンピックの取材に派遣されました。

携帯した機材は、ニュース取材用のDR-70ムービーカメラ2台とトランク一杯の16ミリフィルム。同行したのは早稲田のスキー選手だった杉山健三ディレクター。

グルノーブルに着くと、1月の下旬というのに、街には雪がなく札幌との違いに驚いたものです。雪との対面は、街から20キロほどの標高約1000メートルにあるスキーリゾートで、更に1000メートル上に競技場があります。

リゾートホテルの周辺はレストランやショッピングモールが並ぶ華やいだ風景で、真冬というのにプールで泳ぐ人、デッキチェアで日向ぼっこをする人がいて、日本とは全く違う気候でした。

雪は日中の強い陽射しで緩み、夜は冷えてシマリ、堅いゲレンデが出来るわけです。

多分ニュース用でしょう。スラロームで、旗門をくぐる選手に並行してムービーカメラを手持ちにしたカメラマンが滑っていくのにはビックリ。そのカメラマンは元オリンピック選手だったとか。

フランスの人はあまりテレビを見ないのか、フロントでテレビを見たいと頼むと、扉の奥からゴロゴロとキャスターつきのテレビを運んできます。テレビ取材の様子は、競技場でカメラ位置をメモして、ホテルに帰ってからテレビ画面を見て参考にしました。

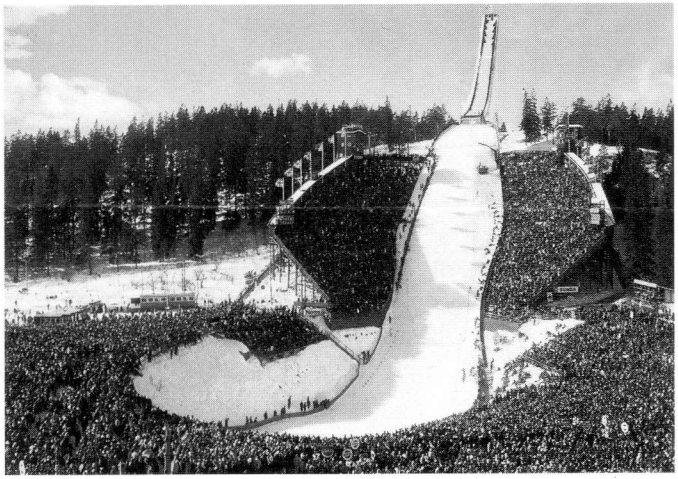
その後、グルノーブルから北欧に向かい、北の人びとの生活などを取材。フィンランドの小学校には、当時まだ日本では珍しかった

サウナがありました。校長さんがサウナの中で真っ赤に焼けた石に小枝の葉ですくった水をふりかけながら歌い出しました。「ウエヲームーイテ」、坂本九ちゃんの歌が世界中で歌われていたのです。

夕食後、零下20度の凍るような寒さの中、家族で〈歩くスキー〉や〈スケート〉を楽しむ姿を見てこの国が冬のスポーツの先進国であることを痛感しました。

ロシアに抑圧されてきたこの国の人々は、日露戦争に勝利した東洋の国に親近感があるのか、街を歩くと人びとが振り返り、レストランのテーブルには「日の丸」が置かれるという具合で、一寸ばかり面映い思いをしました。

ノルウェーのホルメンコーレンのジャンプ場は世界的にも有名ですが、ジャンプ台から見下ろすとブレーキングエリアを取り巻いて街中の人が集まったかと思うほどのすごい数の観客です。ジャンプの藤沢が全盛の頃で「タカシフジサワ！ヤパーン！」という観衆の掛け声が耳に入ります。



ホルメンコーレンジャンプ場

この国で是非食べたいと思っていたので「バイキング料理の店は？」とホテルで聞くと、「知らない」と首をかしげます。杉山さんが日本のガイドブックを見せると〝ビキング〟だと。言葉は難しい。

こうして、取材と勉強に加えてその土地の生活に少しばかり触れながら過ごした40日でした。

白に負けないカメラを

帰国して、まず取りかかったのはカラーカメラ購入のための調査です。候補に上がったカメラを、残雪のある手稲に持ち込み雪景色の映像を綿密にテスト。真っ白な雪景色で人物写真を撮ると、白に押されて上手く写らなかった経験がおありでしょう。どんな優れたテレビカメラでも所詮はロボットなのです。結局、背景に負けて画が黒ずむことが少なく、使い手が上手く扱えるカメラを選ぶことになります。

当時TBSでは、フィリップス社製3P（プランビコン）カメラ・PC-60をスタジオ制作に使っていました。屋外の映像は見ませんでしたが、イメージオルシコンを撮像管に使っているカメラとは格段の差でした。しかし、TBSでは東芝と新しい3Pカメラの制作を進めていて、これから導入するカメラは輸入に頼らないということでした。国産のカメラが希望に近ければそれに越したことはありません。しかし私は、種々のテストを踏まえて60の改良型のPC-80に的をしぼりました。外観は60

カメラと同じですが、分光に使っているプリズム特性が更に向上していること、黒のフィックス調整が上手く出来ることなど、特に冬のスポーツ競技では力を発揮すると考えました。

日本の赤を見事に映し出す

HBCでもネット番組のカラー放送は始まっていましたが、自社制作は1968年9月の「北海道開基百年式典」の中継を目標に、これに合わせて設備の購入を図ることになりました。年明け早々の常務会で「今後5年間、この性能を上回るカメラは出ないと思う。その後3年間に新しく出るカメラにも遜色のない映像を出せると思う。問題は、国産に比べて値段が高いことです」などと大層な説明をした覚えがあります。

日電でスイッチャーなどのシステムを装備。PC-80カメラを4台積んだ14トンの中継車は、仙台、青森へと国道4号線を北上。フェリーで函館に上陸し、社員が出迎える札幌本社に到着しました。

天皇、皇后をお迎えした記念式典はHBC、STV、NHK3社の同時中継でした。日本人誰でも

が持つ記憶色は「日の丸」の赤色と言えるでしょう。80カメラは、4台共にほぼ忠実に「赤」を映し出しましたが、他社のカメラでは様々な色の「日の丸」がお茶の間に届けられたようです。

またこの中継では、部員が工夫した〈タイヤドーリー〉が活躍しました。柔らかいグランドを移動し易いよう、固い車輪に代えて低圧の小型車輪を付けたものです。移動が自由で迫力に富んだ映像を撮ることに成功しました。

このカメラのドラマ第一作は、守分寿男さんの『東芝日曜劇場・女房の眼鏡』でした。80カメラは透き通るような女優さんの肌色をそのまま表現してくれたのです。HBCのドラマはロケが多く、画の美しさが評判になりました。

年が明けて、このカメラに最初の冬の試練が訪れました。2月、藤の沢スキー場で開かれたスキー回転競技大会でした。途方もない寒気団が上空に居すわる真っ只中での中継で、機材セッティング時の外気温はマイナス20度。翌日の本番にカメラの電源が生きているかの一点が勝負でした。寒気に曝された中継車の電源トランスは芯

マイナス20度で活躍するカメラマン

まで冷えてしまう。数人の部員が寝ずの番ですべての電源を切らずに対応し翌日の放送は無事終了。

カラーは「見せる」中継を

スキーの華というべきジャンプの中継は、モノクロの経験はありましたが、カラーはもっと「見せる」中継をと考えました。

80カメラを輸入する時にお世話になった日本ビクターの技術担当グループがスロービデオの試作をしていました。直径16インチほどの磁気シートを高速で回転させ、ジャンパーの空中姿勢をスローで再現させるのです。今は当たり前のことですがジャンプ競技の迫力を倍増させる試みでした。アオリで受けて俯瞰で送るカメラ操作は、秒速25メートルで飛行する選手の表情や身体の動きをフレームの中にピッタリおさめてフォローしな

ければなりません。ベテランだからこその至難の業です。そのためカメラマンは前日の練習ジャンプを見て、高く飛び出すか低く行くか、選手の癖をチェックして本番に備えています。

ジャンプの迫力を撮る（HBC杯ジャンプ大会）

札幌オリンピックまであと2年となった1970年末、全競技の国際映像を担当するNHKとの間で手稲山の競技3種目にHBCが参加することが決まりました。

本番とほぼ同じ規模でプレ五輪が開かれたのは前年2月でした。この時期は年間で最も降雪が多く、かつ寒い。コースを整備する自衛隊員が足で雪を踏み固めるツボ足による固いゲレンデ作りが連日続きます。勿論、圧雪車も使いましたが、これが事故を起こしました。

広いキャタピラと低重心のこの車は、かなり急斜面のゲレンデも上り下りは平気ですが横方向にメッポウ弱く、運転を誤って急斜面を横滑りしてきたのです。はじめはスローモーションのように、次の瞬間には、猛烈な勢いでケーブル施設作業中のスタッフに向かってきます。

カメラタワーから見ていた私は「逃げろー」と大声を出したのですが、胸まで雪に埋もれて作業中のスタッフには何のことか分かりません。

幸い、車の滑る向きは変わったのですが、今度はまともに私の方に向かってきたのです。防寒着で着膨れした体は身動きがとれません。右、左、どちらに逃げるか、一瞬のことで右へ。だが逃れることが出来ず、圧雪車とそれに押されてきた雪に巻き込まれ、そのままゲレンデを滑り落ちました。150メートルほど下がったところでようやく止まるまで随分長く感じました。

息を吸い、「助かったな」と、先ず手足を動かしてみました。車は私の下の方に止まっていました。最後は私の体の上を越して行ったようです。雪に足を取られながら、皆が駆けてきてくれました。

このプレオリンピックの経験で、カメラの位置は、競技開始の時刻と、その時の太陽の位置を考えて綿密に決定されました。

半逆光が生んだ偶然の美

72年の札幌冬季オリンピックは2月3日から10日間、35カ国が参加して開かれました。

2月8日は、HBCが担当する手稲の女子大回転の国際映像制作の日でした。プレ五輪では、大会期間中の8日間好天が続いたというのに、天候は荒れに荒れ、競技のスタートが大幅に遅れました。手稲がこんなに荒れるのは、山が「おんな山」だからだと誰かが話していました。色鮮やかなスキーウェアに身を包んだ女子選手に山の神が嫉妬したのでしょうか。

全長2000メートル、最大斜度32度のコースで、待ちに待った競技が開始されました。

気合鋭くスタートゲートを切った選手が、緩斜面を下り、急斜面

の壁に突っ込んで行く。この競技での最大の狙い所です。ところが競技開始が遅れたためこれをフォローするカメラの映像が半逆光になってゆくではないですか。プレ五輪以来、いや、もっと前から考えに考えたカメラ位置なのにと、今更悔やんでも仕方ありません。「失敗だ」と観念しました。

選手はほぼ1分おきにスタートします。急斜面に入る直前のエッジングで削られた雪がふわーっと白い煙のように舞って、半逆光に映し出されてスローモーションのように空中に散る、雪煙と、選手の動きのオーバーラップ。それはまさに幻想の世界でした。

最初は不測の事態に打ちひしがれていましたが、偶然の演出に助けられ、思いもよらぬ、素晴らしい映像が生まれ、衛星中継で全世界に伝えられたのです。技術がどんなに進歩しても、偶然が生み出すものを越えることは出来ないのかもしれません。

大荒れの天候は2月11日の女子回転競技まで続きました。そしてなんと、その翌日の男子回転は嘘のように好天に恵まれ、やはり、手稲山は「おんな山」を証明したようです。

NHKからも、EBUなど外国メディアからも「悪条件のなかで完璧な中継だった」「史上最高！パーフェクト」とお褒めを頂きましたが、「なるようにしかならなかったのに」と、なんとも、くすぐったい思いをしたものです。

懐かしい先輩や友人たち

函館の実験局で応援して頂いたTBSの、斉藤多美松、末次誠、高柳俊、新井清治さん。Bサブで教えて頂いた吉本琢郎さん、3P開発の金子正廣、菱田市彦さん、国際見本市でTBSスタッフと共に汗を流したRKBの大木哲夫、濱田桂一さん、沢山の方にご指導を頂きました。

優秀な部員にも恵まれ、いつも幸せでした。カメラを握らせたらこの人という、佐々木俊幸、川島國男、矢萩勲さんや、ロボットのようなカメラに生命を吹き込んだ名VEの早坂敬司さん、VTRの宮島義彰、スポーツTDの神代雄彦さんなどなど、アイディアマンで努力家で情熱家。テレビカメラとつきあって18年。モノクロからカラーへと時代と共に歩んだ短い年月でした。

今もお元気な方、不幸にして、幽明境を異にする方もおられます。有り難うございました。

昔のことを語り合いませんか、メールをお待ちしています。

hakasiya@mcn.ne.jp

32度の斜面を滑る 女子大回転